



護国寺の桜



石段を上がり不老門を抜けると満開の桜が参拝客を迎えてくれます。

ピンクの桜と緑の薨が美しいコントラストを見せています。



「護国寺の桜」で思い出すのが三好達治の「鶯のうへ」です。

「あはれ花びらながれ をみなごに花びらながれ」で始まる詩は護国寺が舞台である、
とされています。

「鶯のうへ」の「鶯(いし)」とは寺の石畳のこと。

うらかな春の日、鶯のうへに佇み達治は何を思ったのでしょうか？

詩人の心に思いを馳せながら桜を観れば、また一層味わいも深くなるのではないのでしょうか。

鶯のうへ 三好達治

あはれ花びらながれ
をみなごに花びらながれ
をみなごしめやかに語らひあゆみ
うらかなの鶯音〔あしおと〕空にながれ
をりふしに瞳をあげて
鶯〔かげ〕りなきみ寺の春をすぎゆくなり
み寺の薨〔いらか〕みどりにうるほひ
廂〔ひさし〕々に
風鐸〔ふうたく〕のすがたしづかなれば
ひとりなる
わが身の影をあゆまする鶯〔いし〕のうへ